

銭形平次捕物控

ガラッ八手柄話

野村胡堂

青空文庫

「ね、親分、こいつは珍しいでしょう」

ガラツ八の八五郎は、旋風せんふうのように飛込んで来ると、いきなり自分の鼻を撫なで上げるのでした。

「珍しいとも、そんなキラゲのような鼻は、江戸中にもたんとはねエ」

銭形平次は、縁側に寝そべったまま、その消えた煙管きせるを頬に当てて、真珠色の早春の空を眺めながら、うつらうつらとしていたのです。

「あつしの鼻じゃありませんよ。ね、親分、三つになる子供が身投げをしたんですぜ。こいつが珍しくなかった日にや——」

「待ってくれ八、三つになる子供が身投げした日にや、五つくらいになると腹を切るぜ」

「親分、冗談じゃありませんよ。ほんしろがねちよう本銀町の藤屋せがれの倅で、万

吉という三つの子が、ゆうべ裏の井戸へ落ちて死んだんですよ。

町内の噂うわさを聴いて、今朝ちよいと覗いてみると、井戸側の高さは二尺くらい、子供の首ったけあるんだから、間違つて落っこつたとは言えませんかよ」

「なるほどそいつは少し変だな。ふみだい踏台でもなかったのか」

「踏台も梯子はしごもないから不思議なんで」

「どこの世界に井戸側へ梯子をかけて身投げをする子供があるものか」

「だから変じやありませんか、ね親分、ちよいと御神輿おみこしをあげて――」

早耳のガラツ八は、変な臭いを嗅ぐと、親分の平次を駆り出しに來たのです。

「そいつは御免を蒙こうむろう。今日は少し血の道が起きているんだ」「ヘエー、そいつは知らなかった。裏で張物をしているようだったが」

ガラツ八はここへ飛込むときチラリと目に留まった、姐あねさん被かぶりの甲斐甲斐しいお静の姿を思い出したのです。

「血の道はお静じゃない、俺だよ」

「へエー親分が、血の道をね？」

「眩暈めまいがして、胸が悪くて、無闇に腹が立つて——」

「そいつは二日酔じゃありませんか」

「男の二日酔は血の道さ。今日は一日金持の隠居のように、暢氣のんきな心持でいたいよ。お前が一人で埒らちをあけて来るがいい。赤ん坊が井戸に落っこつたくらいのこと、八五郎兄哥あにいを働かせちや済まねえが、万両分限の一と粒種が変な死に様をしたのなら、思いのほか奥行のあることかも知れないよ」

「へエ——」

「何をぼんやりしているんだ、早く行ってみるがいい。あ、それ

から、子供が井戸へ落ちたのを誰がどうして見付けたか。見付ける前に水を汲まなかったか。水を汲んだら、それを呑んだ奴と呑まない奴とを調べるんだ。いいか、八」

平次はこの事件だけでもせめて八五郎の手柄にしてやろうと思うのでしよう。不精らしく寝そべったまま、注意だけは恐ろしく細こまかいところまで行届きます。

「なるほどね、子供を投げ込んだ野郎は、当分その水を呑む気にはなるめえ。さすがは親分だ。うめえところへ気が付く」

「何を独り言を言っているんだ。門かどぐち口でモジモジやっている、乞食坊主と間違えられて、犬をけしか嚇けられるぞ」

「……………」

ガラツ八の八五郎は、ともかく本銀町まで飛びました。御金御用達の藤屋万兵衛は、りゅうかんばし竜閑橋からほんごくちよう本石町までの間——本銀町の一角を占めた宏大な構えですが、一と粒種の万吉が死んで、今朝はあわただしいうちにも、お押し付けられるような、陰気な空気に閉されておりす。

八五郎は顔見知りのだれかれに挨拶して、裏口からスルリと滑り込みました。

「まア、八五郎親分。誰か坊っちゃんを殺したとでも思っているんですか」

と声を掛けたのは、主人万兵衛の甥で、藤屋の番頭をしている喜八の女房、あだな綽名をガラ留とめと言われる、二十七八の大年増お留で

した。

「あ、お留さんか。そんなわけじゃねエが、三つになる子が井戸側を這い^は上がって身投げをするわけはねえから、ちよいと覗きに來たんだよ」

八五郎は照臭そうに、長い^{なが}顔を撫で廻しました。

「イヤだねエ、二つや三つの子が首^{くび}縊りや身投げをするものか。物好きに石を踏台にして井戸を覗いて、グラリとやったのさ。もつとも、坊っちゃん^{やん}が死んだ方がいいと思う人間が、二人も三人もいる家だから、——そう思われるのも無理もないが。まさか、あんな可愛らしい子供を、井戸の中へ抛^{ほう}り込むような——そんな鬼のような人間はいないだろうよ」

さすがはガラ留でした。少し鼻を詰らせながらも、ガラツ八の身分柄も考えずに、思った事をみんな喋しゃべ舌らずには済まない人柄です。年の割には少し若作りで、ハチ切れそうな精力がみんな口へ発散するらしく、町内の金棒引きも、この女の前に立つと威力を失います。顔立ちは綺麗な方で、色白で邪念のない笑いを一杯に漲みなぎらせながら、少し伝でん法ぽうな調子でまくし立てるところなどは、腹の底からの結構人でなければなりません。

「坊っちゃんがいないと気が付いたのは、いつの事だい」

「暗くなつてからですよ。いったい坊っちゃんに付いているはずの婆やが間抜けじゃありませんか。何のために給料を貰っているんだか解りやしない」

「死骸を見付ける前に水を汲まなかったのかい」

「汲みましたよ。浅い井戸だけれど町の中で埃が立つから、蓋をしてあるんで、小僧の定吉も四方が暗いから気が付かなかったんですとさ」

「その水は」

「幸い晩の仕度は済んだ後だったが、お仕事に使ったり、私なんかは喉が渴いて二杯も三杯も呑んだり」

お留はさすがに胸が悪そうにするのでした。

「見付けたのは？」

「二度目か三度目に水を汲んだとき、釣瓶に障るものがあつたんで、気が付いたんですって。小僧の定吉ですよ。もっともそのと

き家の中では、坊っちゃんが見えなくなつて大騒動だったから、定吉ももしやと思つたんでしよう」

「息を吹返す見込みはなかつたのかい」

「一刻いつとき（二時間）も前に落ちた様子ですもの、助かる道理はありません」

「坊っちゃん死んだ方がいいと思つてゐるのは誰と誰だい」

「それはね、八五郎親分」

ガラ留もさすがにこれは言い兼ねました。が、何かこの家の中に、よからぬ空気のあることだけは確かです。

八五郎は岡っ引本能に操あやつられるように、もういちど井戸側を覗いてみる氣になりました。お勝手口から底ひさし続きに五六間行つたと

ころ、ずいぶん不便な場所ですが、お濠ほりや下水の差し水を嫌って、わざとこんなところへ掘ったのでしよう。

「おや！」

八五郎は愕がくぜん然ぜんとしました。今朝までなかったはずの手頃な石が一つ、土の付いたまま井戸側の横の方に置いてあるのです。これを踏台にして、子供が井戸を覗きましたと言わぬばかり。八五郎は何かしら、容易ならぬものを嗅ぎ出せそうな気がしたのでした。

「おい小僧さん」

「へエ——」

「お前は定吉とかいうんだね」

「へエ——」

「坊っちゃんの死骸を見付けたのはお前だろう」

「へエ——」

「日が暮れてから最初に水を汲んだ時、井戸に蓋がしてあったのかい」

「へエ——」

すっかり脅えきつた小僧は、ガラツ八の突っ込んだ問いにガタガタ顫えてさえおります。

「間違いはあるまいな。そいつは大事なことなんだが——」

「確かに蓋がしてありました。その上に釣瓶が載っていたんですから、間違いはありません」

「その蓋を開けて水を汲んで、中に子供が落ちていることに気が付かなかったのか」

「蔵の蔭で、ここは日が暮れると真っ暗なんです」

定吉は泣き出しそうでした。十四になっても、少し智恵の遅い方らしく、物の筋道を立てて考えるのが、少し手間取ります。

「坊っちゃんは、誰に一番なついていた」

「婆やの次はお島さんとお留さんですよ」

「お島さんと言うと？」

「御養子の金次郎さんの配偶つれあいで」

「嫌いなのは？」

ごしんぞ

「御新造さんと大旦那と、金次郎さん」

「年を取ってから一人っ子で、大旦那はたいそう可愛がったそ
うじゃないか」

「大旦那はあんまり可愛がるから、うるさかったんでしょ」

「御新造の方は」

「藤屋万兵衛の後妻で、年が二十以上も違うお乃枝のえというのは、

御新造と言われても不思議のない若さで、一人っ子の万吉にも継ましい仲だったのです。

「新造さんの方では好きでも嫌いでもなかったようです」

「坊っちゃんが生んで喜ぶのは誰だい」

「喜ぶ者なんかありやしません」

「そんなはずはないと思うが、よく考えて御覧」

「奉公人たちは、世話が焼けなくて、少しは楽になるかも知れないけれど」

ガラツ八の問いの厳しさに対して、定吉の答えはまた、なんと
いう無技巧なことでしょう。

「坊っちゃんが死んで得をする者はあるだろう」

「……………」

「一人っ子の坊っちゃんが死んだ後は、誰が藤屋の跡取りになるんだ」

「若旦那の金次郎さんでしょう」

なんという無造作さ、ガラツ八は「二に二を足して四」と答えられたような気がして、少しばかり拍子ぬけがしました。

「ゆうべ死骸の揚がる前に、水を呑んだのは誰と誰だい」

「大旦那とお留さんだけです」

「ゆうべのお菜が塩辛かずかつたのか」

「そんな事はありません」

ここまで訊いて、ガラツ八は小僧と別れました。お勝手口を入ろうとして、フト、井戸端へ今朝までなかった石をおいたのは誰か、それを定吉が知っていたような気がしました。が、もう一度井戸端へ引返したときは、どこへ行ったのか、小僧の姿はもうそ

ここには見えなかったのです。

家の中へ入ると、重つ苦しい空気がさすがにガラツ八の心持を滅入らせました。

主人の万兵衛はそれでも葬式の指図を番頭に任せて、奥の一間にガラツ八を案内してくれます。

「お気の毒ですね、旦那」

ガラツ八が言える悔^{くや}みは、これが精いっぱいでした。

「察して下さいよ、八五郎親分。歳を取つての一人っ子で、眼へ入れても痛くないように思っていたのが――」

万兵衛はせぐり上げるように口をつぐみます。

「やっぱり過ちだったでしょうか、旦那」

「まさか、あんな子供を、井戸の中へ抛り込むような非道な人間はいないだろう」

「一応そう思いになるのも尤もですが、いろいろ腑に落ちないことがありますよ」

万兵衛は深く暗い緘黙に陥ちます。

「ところで坊っちゃんを邪魔にするようなものはなかったでしやうね」

とガラツ八。

「そんなものはあるわけではない。あつたらこの私が家へ置かなかつたらうよ」

決然としたものが、万兵衛の眉宇に現れます。

「坊っちゃんが亡くなると、ここの跡取りはどうなるのでしょうか？」

「跡取りは養子の金次郎だ。あれは倅が生きていても、死んでしまっても、少しも変りはない」

万兵衛は「当り前の事」と言わぬばかりです。

「それは坊っちゃんが生きているうちから、皆んな知っていることでしょうね」

「五年前金次郎を養子にするとき、親類方に集まって貰って決めたことだから、皆んな知ってるはずだと思うが――」

「すると、坊っちゃんが死んでも、あんまり儲^{もう}かるものはありませんね」

「人が一人死んで儲かるなんて、イヤな事だな」

万兵衛の苦々しい顔を見ると、ガラツ八も言つてはならぬ事を言つたような氣になるのでした。

三

藤屋万兵衛は五十四、その内儀のお乃枝は三十二の若盛りでした。二十二も年の違うのも、世間から何とか言われるのも承知で貰つた後添いで、きりよう好みや、浮氣心で迎えた女房でない証拠は、女ながら万兵衛に代つて内外を切つて廻す腕前の見事さ、町内で誰知らぬ者もないやり手でした。

ガラツ八は一応逢つてみましたが、

「可哀想なことをしました。——でも私は何にも知りません」

美しくはありませんが、色白のキリリとした顔を振り上げて、正面から冷たい瞳^めを向けられると、ガラツ八はただもうたじたじとなるばかりです。

夕方の忙しきで、内儀が店から動かなかつたのは、多勢が見て知っている上、万吉が見えなくなったのも気が付かず、夕飯の席に來ないので、始めて騒ぎ出した——と静かに語る調子にも何の誇張もありません。

番頭の喜八は、万兵衛の亡くなった女房の甥で三十五六、本当はこの家の養子にもなるべきでしたが、子飼いで知られすぎたい

るので、かえって問題にならず、それに番頭に生れ付いたような男で、風采も、調子も、おおだな大店の主人向きでないのと、亡くなつた内儀——万吉の実母で、喜八の叔母に当るのが、遠慮をして夫万兵衛の血縁から金次郎を選び出させ、喜八はどうとう万両分限の相続者としては噂にも上らずにしまったのです。

「番頭さん、藤屋の跡は、坊っちゃんが生きていても、金次郎さんが取るはずだったそうだね」

ガラツ八はこんな事から始めました。

「へエ——、そんなお話でしたよ」

「お前さんは、坊っちゃんに嫌われていたそうだね」

「へエ、若旦那（金次郎）ほどじゃありませんが、——なにぶん

お店の仕事が忙しくて、お相手も出来なかったようなことでね」
 喜八は華おとく客様の前へ出たように、揉手もみでなどをしているのです。
 「すると、坊っちゃんが死んで、あまり得の行く人間はないわけだね」

「へエ——、まアそんな事で」

不得要領のまま、ガラツ八は養子の金次郎に鉾ほこを向けました。

「そんな事があるものですか、万吉を殺したって、何にもなりやしません。あんな可愛い子を、誰が」

ガラツ八の疑いを一挙に粉碎する意気込みで、金次郎は突っかって来るのです。二十五にしては若々しい男で、なんかこう情熱的なものを感じさせる、若旦那型の変り種でした。

「そうかも知れない、が」

ガラツ八は妙に言い捲まくられます。

「それに違いはありませんよ。馬鹿らしい。子供が井戸へ落ちる度に、お上の御厄介になった日にや」

「あれ、お前さん」

若い女が後ろからそつと金次郎の裾すそを引きました。金次郎の女房のお島というのでしよう。まだ二十歳そこそこの、こればかりは美しいきりようで、身だしなみもよく、態度も初々しく、妙に色っぽさを持った取廻しです。

「放つておくがいい。——皆んな泣いているのに、じろじろ家中にうちを睨にらみ廻されちや、癩しやくに障さまたつてかなわな

「あれ、そんな事」

お島は飛付いて金次郎の口でも塞ふさぎたい様子でした。すぐ眼の
前なんがあごに長い顎を撫でて、怖い小父さんが居るのです。

ガラッ八は間の悪い顔をもういちど勝手口へ持つて行きました。

「親分さん、——坊っちゃんかたきは人に殺されたに違いありません。

——敵を討かたきつて下さい。どうぞ、お願いですよ」

そつと囁ささやくのは、四十五六の女、これが万吉を育てた婆やのお
冬でしょう。ガラッ八がふり返ると、人目を憚はばかりながら、そつと
手を合せて見せるのです。

「知ってることをみんな言ってくれ。坊っちゃんを誰がいちばん
邪魔にしていたんだ」

「誰も邪魔になんかしませんよ」

「目に余るほど可愛がったのは？」

「私の外には、お島さんとお留さんだけですよ」

「御新造は？」

「抱いても下さいません。そんな空々しい事はお嫌いなんだそうです——もつとも人見知りがひどくて、男の方の腕へは行かない坊っちゃんでしたから、お店の方なんかも、腹の中ではあんまり可愛いとは思わなかったかもわかりませんが——」

そう言われるガラツハの頭の中には、容疑者の顔が二つも三つも四つも浮かんで来ます。

「それからあの、——定吉どんが、親分さんに申上げたい事があ

るって言っていましたよ」

お冬は思い出したように付け加えました。

「どんな事だろう」

「先刻さつき親分さんが不思議がった石を、井戸端へ持って行って置いた人の後ろ姿を見たんですって」

「そいつは有難い、定吉はどこにいるんだ」

「お店の方でしょう」

が、しかし、ガラツ八が飛んで行った時は、定吉の姿は見えませんでした。店で訊いてみると、番頭に言いつけられて、どこかへお使いに行つたというのです。

四

ガラツ八の八五郎は、その足で八丁堀に廻つて、ともかくも一応の報告を済ませ、神田の錢形平次のところへ顔を出したのは、もうその晩も遅くなつてからでした。

「こんなわけですよ、親分。子供が間違つて井戸へ落ちたのなら、その後をちゃんと蓋までしておくわけではないから、投げ込まれて殺されたに決っていますよ」

ガラツ八の説明は、思ひのほか行届きます。

「それ見るがいい。お前だつて一生懸命になりや、ちゃんと勘かんど所ころを押えて来るじゃないか。あとはほんの一と息だ」

「ヘッ、そう親分に言われると、満まんざら更悪い心地じゃありませんがね」

「どっこい、まだ顎なんか撫でるには早いよ。肝かんじん腎の小僧に逢わずに來たのは大きな手落ちだ。八丁堀なんか、明日でもよかつたんだ」

「へエ——」

「もういちど本銀町へ行つて御覽、きつと面白いことが手に入るぜ」

「もう亥刻よつ半（十一時）ですよ、親分」

「亥刻ここのつでも子刻（十二時）でも構わないよ、御用に時刻があるものか」

「へエ——」

ガラツ八は憑かれたような心持で本銀町へ引返しました。が、小僧の定吉は、芝へ使いに行ったきり、いつまで経っても帰って来なかったのです。取立ての金を三十両ばかり持っているはずですから、フト魔がさして持逃げしたのではあるまいかと疑われましたが、翌^{あく}る朝 竜閑橋^{りゅうかんばし}の側から定吉の死骸が上がって、その汚名だけは雪^{そそ}がれました。もつとも持っていたはずの三十両は財布に入れたまま、盗^とられたものと見えて、死骸にも、その側にもありませんでした。

さんざん平次に叱られたガラツ八はそれから必死と調べましたが、万吉を井戸へ投込んだ曲^{くせもの}者も、定吉を殺して三十両盗った

曲者も多分これは同じ人間だろうと平次も言いますが——月を越しても、まるつきり判りません。

その晩、定吉の帰りの遅いのを、誰が一番心配したか——ということを、平次の智恵で、藤屋で訊いてみると、

「そりや私さ、私はあの子と一番仲がよかったんだもの。——日が暮れてから、何べん外へ出てみたか知れない」

と一番先に名乗ったのはお留でした。お留の夫の喜八は心配するだけ。主人の万兵衛夫婦は、翌る日の葬式の仕度に忙しく、お島と金次郎は、お留の後で、一二度外へ出てみたというだけ。ガラツ八にはこれが何の手掛りになるやら一向判りません。

そのうちに江戸中へドツと春が来ました。諸方の桜が咲いて、

花見の連中が、あっちへこっちへと賑やかに繰り出します。

子供と小僧が死んで、三十五日が済んだばかりですが、闊達かつたつな主人の万兵衛は、自分のせいで家族や奉公人たちまで滅入り込ませるのは気の毒と思ったか、今年は一つ出入りの者を皆んな呼んで、存分に賑やかな花見をしようと言ひ出したのです。

その仕度が大変な騒ぎでしたが、とにもかくにも、三艘そうの花見船が両国から漕こぎ出したのは、よく晴れた三月のある日、白い眼で見られながらも、ガラッ八の八五郎は、万兵衛に頼んで親船に乗ることになりました。

人数は芸妓末社を加えて四十人あまり、そのうちの半分は万兵衛とその家族たちの乗っている、屋形船に詰め込んだのですから、

その賑やかさというものはありません。

「番頭さんが見えないようだが——」

ガラツ八はフトそんな事に気が付きました。喜八の姿はどこにも見えなかったのです。

「昨夜、危うく殺されるところでしたよ」

そつと囁く者があります。ふり返ると喜八の女房のお留が、今日を晴と着飾りながら、なんとなく物々しい眼を光らせております。

「どうしたんだ」

「外で火事だというから、あわてて二階から降りると、滑って転げ落ちて、ひどくお尻を撲うつたんです」

「そいつは危ない」

「当分動けそうもありませんよ。——火事は、誰の悪戯いたずらか裏でゴミを燃やしたんで、すぐ消えてしまいましたが、——ね、親分、怖いじゃありませんか。梯子段に油が塗ってあったんですよ」

「油？」

「え、行灯あんどんの皿を一杯空からにするほど」

「時刻は？」

「亥刻半よっそこそこ、寝たばかりでした」

「その二階には誰と誰がいるんだ」

「私たち二人きりですよ——」

「フーム」

「尻餅をついたからよかつたようなものの、逆さまに落ちたら一ぺんに死んでしまいますよ。私はもう、あの家にいるのが怖くてしょうがない」

お留は日頃の陽気さを失つて身を顫ふるわせるのです。一人息子の万吉を殺し、小僧の定吉を殺した曲者は、こんどは万兵衛の甥で、店の支配をしている喜八の命を狙っているでしょう。ガラツ八は何か深刻な鬼気を感じて、ぞつと身を顫ふるわせました。

そのうちにも船は漕ぎ上つて、暗くなりきつた頃は、向島の土手下に差しかかりました。酒が存分に廻ると、踊りと歌が船の中を領し尽して、いろいろ不吉なことなどは、誰も考えている者はありません。

夕闇の中に透^すくと、土手も一杯の人出で、船と呼応して、歡樂の流れがこの世の終りまで続くのではあるまいかと思うほどです。パラパラと村^{むら}雨^{さめ}が来しました。

「あッ、大變ッ」

女どもは悲鳴をあげて、並べた舷^{はしけ}を飛んで、屋根をかけた親船に歸つて来ました。男たちは雨もまた面白い様子で、歌声を縫つて、わけのわからぬ絶叫が乱れ飛びます。

「あッ、大變ッ」

おおげさ
大袈裟な声を出したのはお留でした。

「どうしたどうした」

飛んで行くガラッ八。

「大旦那が、大旦那が」

見ると疎いうと提ちよう灯ちんの灯に照らされて、藤屋の万兵衛が七しち顛てん
 八倒ばつとうの苦悶をつづけているのです。

後ろから抱き起したガラツ八。

「やられた、——酒、酒、——お島、お島」

わずかに万兵衛の口から聴いたのはそれだけ。歓楽の嵐の中で、
 充ち足りた万両分限は、最期の息を引取ったのでした。

五

「こんなわけだ、親分。驚いたの驚かねえの」

ガラツ八の仕方しかたばなしを、平次は黙って聴いておりましたが、

「素人衆みたいに驚いてばかりいても仕様があるめえ。十手捕縄の手前、お前はどんな事をしたんだ」

キナ臭いのを一本、お面ときめ付けたものです。

「主人の万兵衛は酒道楽で、灘なだの生一本を取寄せて、自分だけの飲料にしていますよ。ゆうべも別の樽たるで一升持って行つて、観かんぜ

世継よりで首を結えた徳利で、別に爛かんをさせて飲んでいたが、その徳利を摺り替すえて、石見銀山いわみぎんざんの入つたのを吞ませた奴があるんです」

「どうして摺り替えたと判つた」

「二本残つた徳利を見ると、観世継で縛つてあるが、一本はその

縫がひどく無器用だ。主人の万兵衛が自分で縫ったのは、見事な観世縫でしたよ」

「すると」

「毒酒を入れた徳利はその拙い観世縫で縛ってあったんです。それと入れ替えた本物の徳利は河へ捨てたんでしよう」

「死際にお島を呼んだのはどういうわけだ」と平次。

「お島はお爛番をしていたんです。酒に毒が入っていると、お島が疑われるのも無理はありません」

「それはどうした」

「養子の金次郎とお島を、ともかく縛りましたよ。そうでもしな

きや恰好かつこうが付きません」

「……………」

平次は黙って首を振りました。

「証拠は山ほどありますア」

「たとえば？」

「梯子段に油を塗って番頭の喜八を殺しかけた奴が解ったんです」

「誰だ、そいつは？」

「藤屋の縁の下に、油でぐっしりになった金次郎の前掛けが隠してあったんです」

「馬鹿野郎」

「へエッ」

平次の痛快な叱咤^{しった}を喰って、ガラツ八は首を縮めました。

「自分の前掛けへ油をひたして、梯子段に塗る馬鹿があるもんか。それだけでも金次郎は潔白だ」

「だって親分、お爛番は金次郎の女房のお島ですぜ。それに主人の万兵衛が死際に——」

「お島の名を呼んだのは庇^{かば}ってやりたかったからだ。——どこの世界にお爛番が自分の手で酒へ毒を入れる奴があるものか」

「それに金次郎は、ひどく万吉に嫌われていたそうですよ」

「だから、万吉を抱き上げて、井戸へ抛^{ほう}り込んだのは金次郎じゃないのさ。人見知りをする子で、容易に誰の手へも行かなかったというじゃないか」

「へエ——」

「子供を抱き上げて、声も立てさせずに井戸へ抛り込んだのは、子供と一番仲の好い奴だ。——女だよ、八」

「えッ」

「徳利へ毒を入れて、摺り替えたのも女だ。女に観世絛の上手なのは滅多にないものだ。商人の帳場にいる人間は、みんな観世絛は器用に拵こぎえる」

「すると？」

「あわてるな馬鹿野郎、下手人は女だぞ。万吉のなついていない継母のお乃枝ではないぞ。それからお爛番のお島でもないぞ」

平次はしだいに謎を解いて行きます。

「お冬？」

「婆やのお冬は万吉が死ねばお払い箱になる女だ。その上三年も万吉を手一つに育てている。自分の生んだ子より可愛いはずだ」

「まさか、ガラ留じゃないでしょうね。あの女は人を殺すような柄じゃない」

ガラツ八は愕然がくぜんとしました。

「柄で殺すかよ。万吉が死んで万兵衛が死んで、金次郎が下手人になると、自分の夫の喜八にあのおおしんしょう大身上が廻つて来るじゃないか」

「でも、——変だなア。そのガラ留の亭主の喜八が、油を塗った梯子段から落ちて、危うく死にかけましたよ」

「怪我くらいはさせなきや、自分の亭主へ人殺しの疑いが真つ直ぐに降りかかつて来そうだったんだ。裏のゴミ溜^{だめ}へ火をつけて、何にも知らない亭主を梯子段から突き落とし、尻餅をつかせて、翌^{あく}日の花見に行けないように仕向けたんだ。恐ろしい女だ」

「変だな」

ガラ留のお留の開けっ放しな気性を知っているガラツ八は、なんとしてもこの推理は腑^ふに落ちません。

「喜八が梯子段から落ちたのに、すぐその後からつづいて降りたお留^{すべ}が滑^{すべ}らなかったのは何よりの証拠だ。どうかしたら、梯子段の下に蒲団^{ふとん}くらいは敷いていたかも知れないよ。油も一番上からではなく、梯子段の途中から塗つてあるだろう。もういちど行つ

てみるがいい」

「へえ——？」

「まだ俺の言う事が呑込めなきや、藤屋へ行つて、家中を搜してみるのがいい。お留は惻口りこうなようでも下司げすな女だ。定吉を殺して三十両の金を奪つたのを、捨て兼ねて、どこかに隠しているに違いない。その金が見付かったら、その場でお留を縛るんだぞ」

「へえ——」

噛んで含めるように言われてガラツ八はようやく飛出しました。「馬鹿野郎。こんな判りきつた下手人が縛れなかったら、岡つ引なんかやめつちまえ、——折角向いて来た運を取逃すな」

*

翌る日、ガラツ八は首筋のあたりを撫でながら恐縮しきつた様子で平次のところへやって来ました。

「親分、一と言もねえ。まさに見透しみとおの通り、お留の阿魔あまが下手人でしたよ。——縄を打って引つ立てて行くと、笹野の旦那が褒めましたぜ。これが八五郎の手柄か、大したことだね——つて」

「お前は何と言った」

「実は親分に相談をして、いちいち指図をして貰いました。と」

「馬鹿野郎。なんだってそんな余計な事を言うんだ。ムズムズしながら、家に引込んでいたのは、せめてこれだけでも、まるまる

お前の手柄にさせようと思ったからじゃないか」

「へエ、——相済みません」

八五郎はピヨコリとお辞儀をしました。でも、こう叱られながら、なんとなく幸福です。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（十一）懐ろ鏡」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年5月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物全集第二十卷 狐の嫁入」同光社磯部書房

1953（昭和28）年11月15日

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1940（昭和15）年4月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2019年7月30日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

ガラッ八手柄話

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>